

海外武者修行のすすめとひとり旅の体験（1）

近藤 節夫

1. 海外ひとり旅のすすめ

いま私は自分が奉職する旅行業界に対して、永年に亘って抱き続けてきた「体験的人材育成論」なる‘骨太な若手社員育成のための実践的教育’持論を提言し、その採用と実施、普及について地道に啓蒙活動を行っている。その論旨は、旅行業界の将来を担う骨太な社員養成のためには社員自らが若い頃に自分の才覚で海外ひとり旅を体験し、その過程で臨場感に触れ、彼らが業務上臨場に則して決断力と判断力を発揮できるような現場処理能力を身につけてもらうことを究極の目的にしている。その体験が若手社員を大きく、逞しく育てていくことにつながる。端的に言えば、若い頃にテーマを持ってひとりで海外へどんどん出かけて行くことを奨励するものである。この体験旅行は、戦国の世に自らの剣の腕を鍛錬し、精神の修養を積むことを目的に諸国巡業の旅に出た下級武士たちの「武者修行」の心意気に似通った現代風「海外武者修行」であると私は考えている。これまでの画一的な知識の詰め込み教育や、体験談やケーススタディを一方向的に伝えるだけで寺子屋教育の域を抜け出せず倫理教育に背を向けているような机上の集合教育では、残念ながら真の旅行業界人を育成していくことには限界がある。いまだきの旅行業界人育成の過程には、現場でたたき上げる熾烈な臨場体験があまりにも少な過ぎる。教育課程に臨場体験が伴わなければ逞しい旅行業界人への道は険しいと断言せざるを得ない。

2. 旅行業者としての自信

なぜ私がこれまでの守旧的な教育方法に異を唱え、このような個性的な「海外武者修行のすすめ」を提言するまでに至ったか有体に申し上げよう。

私はこれまで業務の上で大小数々のトラブルや苦情に直面した。また、救いがたい難局に巻き込まれたことも一再ならずあった。添乗員として切羽詰った現場で本当に難しい緊急判断を迫られたことも度々あったが、概してその場で冷静な対応と果断的な処理により何とか急場を切り抜けて来られた。それは明らかに若い頃の「海外ひとり旅」の体験から掴み取った臨場の場における智恵と行動力、判断力のお陰であると思っている。だからこそ若い社員にとり感受性が研ぎ澄まされ、常識の厚い殻の枠外でも考えようとする頭脳の柔軟な時代に、思い切った非日常のひとり旅を体験すべきであると思っている。同時に、翻っていま旅行業界全体に目を向けると旅行業の現状の教育システム、及び教育に関する取り組み方があまりにも安易に定型化され、旅行業の実態や、本質とは根本的にそぐわな

くなっているのではないかと疑問に感じているからでもある。

私が仕事上海外旅行に関わりだしたのは社会人となって6年後の1969年であった。勤務先の大手鉄道会社が正に海外旅行事業を始めようという時であった。その当時、旅行業の素人であった私が企画営業面を全面的に任せられ、独自に調査、企画、提案、そして開発した海外団体旅行が連綿と時を経て、今日も会社の大きな財産として引き継がれているという事実や、自分が考え、工夫して創造し、他社に類似企画商品を企画販売させるほど爆発的に売れたユニークな企画商品を開発した事例、等を含め、ある程度自他ともに認める実績を残すことが出来たことは、旅行業界人としては大きな誇りである。今日でも営業第一線における積極的な活動は控えてはいるが、なお独創的で高品質なツアーを企画し続けながら永年に亘るロイヤルカスタマーに呼びかけ、自分で綿密な旅行先調査を実施したうえで手配業務を行い、添乗業務も自分が責任をもって実行している。

このように長い年月に亘って密度の濃い実務経験があることと、自分の若い頃のひとり旅の実体験が旅行業務にとってかけがえのない財産になったと確信しているからこそ自信を持ってこのような僭越な論旨を提言出来る。いまや逞しい若手社員育成のためには、私の論旨「海外武者修行のすすめ」は絶対軽視すべきではないとの信念を抱いている。

3. 夢中だった駆け出しの頃

前述の通り私が鉄道会社の海外旅行部門とともに歩み、子会社の旅行会社として独り立ちして以来海外企画商品開発や、営業活動に費やした30余年の歳月は、敷かれたレールの上で上司から与えられた業務をマニュアル作業で全うしたのではなく、最初から私自身が自発的に総合的に考え、商品を企画し、販売計画を立て、営業活動の先頭に立って実行した。見よう見まねでただ夢中になって走っていた。正に「盲人蛇に怖じず」と言ってもよかった。旅行業という業種にはずぶの素人ながら海外事情について社内には私より以上に経験のある上司や、同僚は皆無の有り様で在野にいかにも人材の乏しい時代だったとは言え、考えてみれば無謀ともいえる会社の立ち上げだった。会社が海外旅行業務を定款に定め、新たに事業を開始するに際して誰ひとり海外の実情に精通している人材がいないというこの驚くべき素人集団の中でひとり海外渡航歴があっただけの若造が、パイオニア的に海外業務立ち上げの一切に関与して、曲がりなりにも素人旅行会社を何とか海外業務を取り扱う資格と能力を持ちうるレベルにまで辿り着かせることが出来たということはあまり例がないと思う。

幸いなことは、私の考えているアイデアや、企画について議論百出しながらも最終的には上司も同僚たちも私の意見に賛同してくれたことである。実際私は自分で考えて考えて考え抜き、必要とあらば無手勝流でどこへでも出かけた。自分の計画案も周囲に理解してもらえらるまで何遍も説明を繰り返し、漸く納得させはしたが、賛同者がいない最初の頃は全く四面楚歌に近い空気に包まれていたと言っている。過去の海外武者修行で感得した

創造力、構想力、判断力、決断力、行動力、等の全知全能が私自身を思い切って白紙の上に自分の絵を自由に描く心境で前進させることが出来て、それが結果的には幸いしたように思っている。それにしても後年プロの旅行業者として備わった私の基礎能力は、会社とは無縁の自分自身の哲学とそれを実践した海外ひとり旅という独特のパフォーマンスに大きく依存し、したたかに育まれたことは間違いない。

だからこそ、この私の体験が生み出した提言に対して各旅行会社が少しでも若手社員のために連続有給休暇のようなインセンティブな優遇措置を賦与して、彼らが抵抗なく思い切って海外武者修行へ飛び出せるようバックアップして欲しいと願っている。

4. 南方への憧れと60年安保闘争の思い出

子どもの頃、夢中で読んだ本の中でいまでも強く印象に残っているのは、何と言っても「南洋一郎」の冒険小説である。終戦直後であまり子どもが読むような読み物や、雑誌がない時代に親からたまに買ってもらったりすると夢中になって大抵は一晩で読んでしまい、親が呆気にとられていたほどだった。そんな時代に、南洋一郎の冒険物語と山川惣治の絵物語「少年王者」や、映画「ターザン」、漫画本「冒険ダン吉」は、少年の心の中でジャングルや南方への遙かなるノスタルジアを大きく掻き立ててくれた。

60年安保闘争を翌年に控えた1959年(昭和34年)、私は慶応義塾大学へ入学した。すでにその頃日米安保条約に反対する反戦運動のうねりは、大学構内にも侵入していた。高校時代の3年間を思いっきりラグビー部で心身ともに鍛えた私は、大学でも出来れば部活動と専門科目に取り組み、暗かった2年間の浪人生活の鬱憤を晴らしてやろうと希望に燃えていた。

だが、そう思い通りにはことは進まなかった。入学早々クラスの友人を介して、マスコミの耳目を集めていた闘争的な当時の全学連S書記長がどうして私の慶応入学を知ったのか、突然教養課程の日吉キャンパス内にオルグを造れという強い調子のメッセージを伝えてきた。東大緑会の幹部としてマスコミでも時代の寵児として注目されていた高校ラグビー部の一年先輩であったSさんとは、同じフォワードの一員として一緒にスクラムを組み、同じチームメートとしていくつかの県予選を共に戦った。ストレートで東大に入り秀才の誉れ高かったSさんは、練習後の部室では真面目である反面ひょうきんな一面も見せていた。農家の息子であるSさんは、いつもドカ弁を食べながら冗談を言っては仲間の笑いを誘っていた。あのSさんがどうして私なぞを狙い撃ちしたのか。

その頃慶応は各左翼セクトによるオルグ構築の標的になっていたが、左翼活動の基盤が弱い慶応日吉に3派分裂前の統一全学連のセクトを確立させようというのがどうやらSさんの意図のようだった。他大学のニセ学生も日吉キャンパスにやってきては事件を起こし、警察官の立ち入りを巡っては大学当局と学生自治会が対立してラウドスピーカーからアジる蛮声が聞こえ、キャンパス内には不穏で騒然とした空気が漂っていた。学生集会が頻繁

に開かれ、ライシャワー駐日米大使、浅沼稻次郎社会党委員長、野坂参三共産党議長らも続々やってきては、学生相手に彼らの論理でゲキを飛ばしていた。

こういう高ぶった空気のもとで押し寄せる大波に呑み込まれるように私自身も少しずつ安保反対運動に関わるようになっていった。しかし、あの国民運動のような大きなうねりも安保条約が10年間の条件付きながら一旦衆議院で議決されるや、潮が退くようにあつという間に下火となり、学生たちの関心は急速に薄れていった。ともにデモ行進をした友人の中には大学に来なくなったり、精神的な挫折感を味わったり、それぞれが複雑に傷ついた青春時代を送っていた。私もひとつの大きな傷を負った。デモ隊の先頭近くでジグザグ行進をしていた時に、警官隊に至近距離からスナップ写真を撮られてしまった。翌々年の就職活動を考えるといかにも迂闊であった。結局これが遠因となり入学当初から志望していたジャーナリズムの世界も諦めざるを得なくなった。私の周囲にも失望と虚無感が漂い、全体として学生運動にもひとつの転機が訪れた。

5. 海外武者修行の起爆剤

私の実社会へ出る（1963年）前後には、キューバ革命、中国文化大革命、ケネディ大統領暗殺等、国際的に関心を呼ぶ事件が連続的に勃発した。ベトナム戦争の本格化と同時に次第に激しくなっていたのがベトナム反戦運動であった。日本国内にも有識者や、労働界を中心にベトナム反戦運動は労働運動に呼応して一層激しさを加えて行った。春闘も沖縄返還運動と連動するようになり益々エスカレートし、スト権も確立され世相は騒然としてきた。

私はその当時まだ鉄道会社の駆け出し経理マンとして悶々たるサラリーマン生活を送っていたが、平凡な日常生活と流動的な国際情勢の流れの狭間でどうしても国際的に大きく揺れている現実から目を背けたままであることが出来なくなっていた。精神的にも私自身を変えなければダメだと思った。私がこの荒々しいうねりの中に飛び込んで自分の目で世界の現実をしかと見て、自分の感覚で実態を知り自分なりに納得できる行動をとり、理論上も納得しないとこれ以上自分が前へ進めないと考えようになった。そう考えると血の気の多い私は、もう矢も盾もたまらなく現実の中へ飛び込んで行ってみたくなくなった。安保闘争の挫折感からいつも胸の内に燻っていた倦怠感、海外への好奇心、現状打開不能の焦燥感、展望の開けない国際的政治情勢等々がない交ぜになり、これらが反転したエネルギーとなって燃え上がった。このパッションが私をして海外、しかも銃弾飛び交う危険な戦場へひとり旅立たせた大きな要因となった。

もうひとつ私を海外武者修行へ強く駆り立てたのは、作家小田実のベストセラー「何でも見てやろう」だった。小田の著作は全ての内容が強いインパクトで私の心を揺さぶったが、彼の<ベ平連>【「ベトナムに平和を！」市民連合】における行動と実績に象徴されているように彼の発言には常に行動力が伴っていた。そういう小田実の実践的で現状直視の考

え方に私は強く惹かれたが、物書きらしからぬ<ベ平連>リーダーとしての小田の行動力は
なお一層強力で凄まじかった。それが私の熱情にもうひとつ火を点した。

かくして、私は誰に相談することもなくひとりで海外武者修行を決断し、旅の計画を立て、
ひとりで実行に移していくことになる。

次号以降では、私の海外武者修行から掴み取った旅行のノウハウから、新しい分野のツアー
企画を開拓した事例と私自身の「海外ひとり旅」に触れてみたい。

つづく

註) NPO「知的生産の技術研究会」定期機関誌(ちけんだいがく)2001年4月号より
連続掲載第1回分